

産教連通信

技術教育と家庭科教育のニュースレター

産業教育研究連盟発行
http://www.sankyoren.com

目次

□ 今夏の全国大会の開催案内できあがる	1
□ エッセイ「『塩分読書会』のこと」	山崎 勉 2
□ 連載「農園だより(25)」	赤木俊雄 4
□ 連載「風の文化誌(1)」	三浦基弘 6
□ 報告「続・工房見学記」	赤木俊雄 8
□ 図書紹介	9
□ 会員からの便り紹介	10
□ 第65次技術教育・家庭科教育全国研究大会開催案内	15
□ 編集部ならびに事務局から	16

□ 今夏の全国大会の開催案内できあがる

今夏の産教連主催の全国大会(第65次技術教育・家庭科教育全国研究大会)は、奈良女子大学を会場(本通信第206号でお知らせした会場から変更になりました)にして、8月5日(金)～8月7日(日)の日程で実施することが決まり、その要項が発表(産教連のホームページで見ることができます)されました。会員には開催案内(B4判のカラー両面印刷)が配付されます。

大会前日の午後に実践講座を、最終日の午後に特別講座を、それぞれ設定しました。分科会をはさんで、講座に始まり、講座で締めくくるという構成になっています。もちろん、大会恒例となっている教材教具発表会や匠塾(実技コーナー)も組み込んだ日程になっています(大会の概略は本号15ページの大会要項をご覧ください)。

会場は近鉄奈良駅から徒歩で5分ほどの距離にあり、交通至便です。奈良での大会開催ははじめてでもあります。古都奈良の世界遺産の見学を兼ねて、大会に参加するのもよいと思います。6月1日(水)よりホームページ上で申込受付を始める予定です。多くの皆さんの参加をお待ちしております。



第64次技術教育・家庭科教育全国研究大会匠塾(実技コーナー)にて

「塩分読書会」のこと

山崎 勉

1958年暮、小関智弘君が文学好きの仲間に声をかけて、10人ばかりの若者が彼の家に集まった。そこで何か文学の勉強をしようじゃないかという話になり、手始めに作品を読んでお互いに感想を述べ話し合おうと読書会が発足した。選ぶ作品に特に基準はないが、なるべく今、本屋の店頭にあって手に入りやすいもの、値段もできるだけ安いものというのを目安にした。

1959年1月24日、小関宅で第一回の読書会が行われた。作品は『戦いの今日』（大江健三郎著）、報告者は小関智弘君、出席者は4名だった。読書会は、誰でも何時からでも参加できるようにと、規則は作らず、月1回、土曜日の夜に集まることにした。会の名前もそのうち気が向いたらつけよう、ということでスタートして、今でも正式な名前はない。

読書会だけでなく、自分たちでも何か書いて感想を述べ合って勉強しようと、ガリ版刷りの雑誌を作り、「塩分」第1号(1959年6月)を発行した。その後、1968年10月の18号まで、年2回ガリ版刷りの「塩分」の発行を続けた。「塩分」という呼び名も定着し、読書会も何となく「塩分の読書会」と言うようになった。「塩分」ってどういう意味？とよく聞かれる。その1号の「つけたりに」智弘君が「……他に『地の塩』『しおけ』というのがある、甘いほうがなかった……」と書いている。集まった仲間が皆辛党だったと言うのと、労働者なので汗を連想させるとか、人生そんなに甘いもんじゃないよ、しょっぱいよ、という意味を込めているんだ。てなことを話し合っ

て決めたと記憶している。

はじめの頃は出席者も4、5人ということが多く、7人集まれば盛会だったけれども、二、三年経った頃から6人から9人くらいに定着してきた。会は3人から成立し、2人のときは流会で、差し向かいで一杯やりながら雑談、放談した。もっと大勢集めようと、新聞の交流欄に投書したことがある。

確か1965年3月だったと思うが、小関宅の近くの



写真1 読書会(いちばん左が筆者、4番目が小関智弘さん)

熊野神社の社務所を会場として借りて、20人以上集まったことがある。しかし、これは失敗だった。皆でじっくり話し合うには、10人くらいまでがちょうどよいことが分かった。

同人誌「塩分」は、1976年5月に19号が出るまで約8年休刊した。理由は思い出せないが、何となく成り行きでそうなった気がする。その間、1973年9月まで、毎月の読書会はほとんど休むことなく続けてきた。しかし、その後、1975年10月まで、約2年の間、各自それぞれの事情もあって、これまた何となく行われなかった。

1975年、小関智弘君の『粋な旋盤工』の出版記念の会で顔を合わせた仲間が、読書会と「塩分」を復活させることになり、その年の10月、『明るい夜・暗い夜』（E・Sギンズブルグ著）を及川雅史君の報告で再開し、今日まで続く。

雑誌「塩分」のほうは、1976年6月、19号が今までどおり B5 判だが印刷屋に発注して、活字の本になった。印刷代は書き手が毎月2,000円ずつ積み立てることにしたので、金が溜まるまで一年から二年かかるようになった。49号から A5 判にし、50号から各自の作品のページ数に比例して分担することにした。2014年8月「塩分」55号がはじめてカラーの表紙(井上忠久さんの絵)で発行された。

読書会のテーマは当番となる報告者が自由に決めるわけだけれども、その時々話題になった作品とか、その年決まった芥川賞や直木賞の作品も選ばれることが多かった。時にはドフトエフスキーや夏目漱石を続けて取り上げることも試みた。皆が歳を取って仕事から離れたせいもあって、土曜の夜だったのが午後2時からになり、場所も東京都大田区の施設を使うようになった。ここ何年かは8月と12月が休みで、年10回になったが、毎回10人くらいの出席者で継続している。

書きたいことがいろいろあって、収まりきれない。終わりにひとこと。「塩分」4号の智弘君の「ファンキージャズデモ」が「新日本文学」に転載され、彼が世間に知られるキッカケの一つとなった。20号が「文学界」の同人誌評に載り、及川君の「かもめ」の目のつけどころから、読書会の質の高さを評価された。

「朝日新聞」（2009年10月27日）の「秋の読書特集」では、21面トップ、紙面の三分の一ほどのスペースを割いて、「学びとぬくもり50年」「塩分読書会」として紹介された(インターネットで「塩分読書会」と入力して検索すると、記事と写真が見られる)。



写真2 読書会後の大森界隈散歩のひととき

■ 放射能汚染土の除染に思う

……………2016年3月14日

東日本大震災による福島第一原発事故で飛散した放射能物質によって汚染された土の保存場所について、テレビで報道されていました。汚染土は袋に入れています、その最終的な保管場所が見つからないため、現在の保管場所は満杯になっているそうです。汚染土の量は1000万トンで、それを入れた袋は1000万袋にもなっています。日本の人口は1億2600万人ですから、汚染土を日本人全員に分けると、日本人一人当たり80kgの汚染土を持っていることになります。こんな袋は欲しくはないし、受け取る義務ありません。テレビの報道によれば、汚染土を入れた袋の一つの大きさは横1m、縦0.8mなので、土の容量は6000あることになります。結構な量です。

授業でダイコンの袋栽培をしていますので、土のことが気になります。試しに計算してみると、ダイコンの袋栽培の場合の土の容積は150ということになります。単純計算ですが、日本人全員が袋栽培をすると、一人当たり4袋の土がもらえることになります。「この土が栽培に適した土ならば、日本中に花が咲くのに」などと考えました。このように考えると、汚染された土も可哀想になります。

■ 生物育成の簡単教材 “よもぎ餅作り”

……………2016年4月7日

つくしを摘んで、茹でてみました。そのまま食べると、シャキシャキとして、茎が柔らかいです。調味料を何もつけていないので、春の香りを感じます。昔の人も、春が来たことを同じように感じたのでしょうか。

つくし以外にも、春の野山の食べ物を食べてみたくなりました。そこで、よもぎ餅を作ることにしました。ところが、自分で調理したことがないことに気がきました。



よもぎ

最近是不わからないことをインターネットで調べるが多くなりました。早速、よもぎ餅の作り方を調べてみると、アメリカに住んでいるある人が、日本の生活を懐かしんでよもぎの苗を植え、成長したよもぎからよもぎ餅を作るという通信がありました。よもぎは野原に生えているので、栽培することを考えたことはありませんでした。しかし、茹でたよもぎが売られているので、栽培している人もいるのでしょうか。

さて、もち米の持ち合わせがなかったもので、簡単に団子の粉を利用して作ってみました。作り方は次のようです。

1. よもぎを1分間茹でる。

(茹で汁を捨てようとしたのですが、綺麗な緑色なので、飲んでみました。草のお茶も美味しいものです。これは葉草です。)

2. 茹でたよもぎを包丁で切って、すり鉢でする。

3. 団子の粉を水でこねる。

4. 団子を蒸し器で蒸す。

5. 団子をこねる。

6. 餡を入れる。

(しかし、餅が手についてこねるのが難しかったので、諦め、スプーンで取り分けました。)

これでできあがりです。試食してみました。よもぎの葉や茎が柔らかく、美味しい。これをもとに、“よもぎ”をテーマにした「生物育成の簡単教材」を考えました。生物育成の学習でよもぎを栽培し、それを使って、食物の学習でよもぎ餅にするのです。株が残りますので、毎年学習できます。時間もかかりません。餅をついてもよいし、簡単に団子の粉を利用してもよいです。

■ 大豆を栽培しながら世界の食糧問題を考える……………2016年4月29日

「日本の伝統食を考える会」という団体が主宰する「『国際マメ年』“豆料理を楽しむ会”」に参加しました。右に示したのはこの日の献立です。



学校でも枝豆、大豆を作り、その大豆を使って、味噌作りに取り組みます。あわせて、世界の食糧問題についても学習します。

献立
黒豆としみこんにゃくの煮物
てんべい
木綿豆腐・クリームチーズの酒粕漬け
レンズ豆のサラダ
チリコンカン (金時豆)
黒豆の甘露煮オレンジ風味
紫花豆の煮豆
きな粉鮎
うずら豆の五目煮
豆の塩茹 2 種 大豆の青のりかけ
ぜんざい
大豆と豚肉の味噌炒めレタス包み
大豆と昆布の煮合わせ
大豆かりんとう
鶏手羽中と大豆の煮物
炒り大豆とキビ入りご飯
大豆のマッシュコロケ
黒豆煮と日本酒の寒天寄せ
鉄火味噌 まだか漬け 呉汁
年福豆

はじめに

—風は目に見えないが……—

■ 連載にあたって

この連載にきっかけがある。三浦が月刊誌「技術教室」（農山漁村文化協会）（現在は休刊）の編集長時代、同僚の小林公さんが、「風について」の原稿を書いたので、機会があったら利用してもらいたい、と言われたが、それを世に出す機会がなかった。蔵にしまっておくのはもったいないと思い、小林さんの諒解を得、この原稿をもとに、僭越ながら三浦が加筆、補筆して世に出すことにした。太宰治は太田静子の「斜陽日記」をもとに『斜陽』を書き上げたが、少しでもそのようになれば幸いである。

■ 風に思うこと

かぜ。風。風邪。小春日和の日中、ほどよい微風そよかぜが吹くと、とても気持ちがいい。その一方で、巨大な風、台風に遭うと、喜んではいられない。日本は島国。海幸の一つ、魚の干物がある。干物は天日に干すが、風があると、旨味が増すという。風味という言葉に説得力がある。

また、かぜは邪気も運んでくる。その一つが感冒の「風邪」だ。健康上のバランスが悪くなると、頭痛、歯痛、腹痛など「痛」を使う。しかし、風邪は痛を使わず「ひく」。この「ひく」の語源は、「息を引き取る」と同じと唱える学者がいる。すると、「風邪は万病のもと」という言い伝えに納得がいく。

英語で風を一般に“wind”という。そよ風にあたる“breeze”、暴風雨にあたる“storm”という語もある。一般には知られていないが、「強風」と訳す“gale”と

いう語もある。三浦がこの語をはじめて知ったきっかけは、フォース橋である。この橋ができる前に、テイ橋の崩落(1879年12月28日)(図1)があった。落橋の原因がゲール(gale)であった。この橋は、列車の重量を支える力は十分あったが、強風に対する横方向の耐荷力が不足であったため、脆くも海の藻屑と消えたのである。

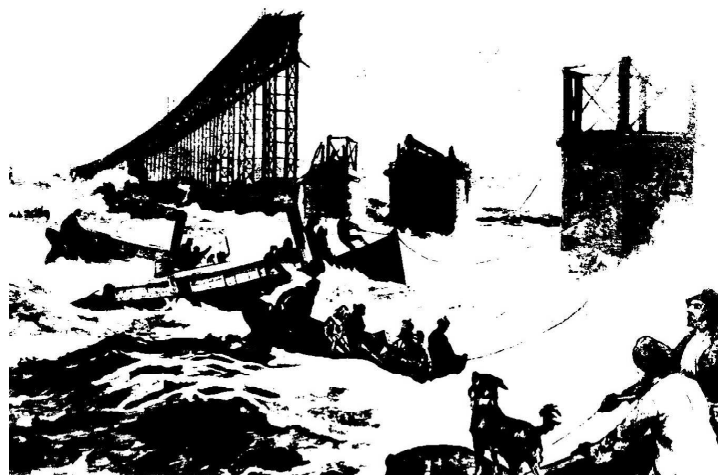


図1 テイ橋の崩落

次回から、風にまつわる話題を提供していきたい。

■ これからの連載の内容

- (01) **はじめに** 風は目に見えないが……
- (02) **風は諸刃の剣** 風の正体
- (03) **明日は明日の風が吹く** かぜは、きままか
- (04) **恐ろしい風** 台風は神風にもなる
- (05) **風と火災** 風災と呼ばれた風
- (06) **風のブレンド** 水気と風
- (07) **風に乗る音** 風の正体
- (08) **風と地球温暖化** 風と気候変動
- (09) **風を利用する** 北風と太陽
- (10) **風と動力** 風のエネルギー
- (11) **風をはかる** 風速計と風向計
- (12) **風車の歴史と種類** 風車のおいたち
- (13) **風車の能力** 風力の利用法
- (14) **風を利用した発電** 風車の風向き制御
- (15) **風車を工夫改善する** 風車の出す音
- (16) **風車を発電以外に利用する** 風力の熱変換
- (17) **風車の普及に伴う標準化** 規格の設定
- (18) **風をつくる** 人口風と効率
- (19) **圧縮空気を利用する** 空気機械
- (20) **風と生活文化** 地域の局地風
- (21) **風と生き物** 風を利用する生物
- (22) **風と健康の害** 風邪のメカニズム
- (23) **風とスポーツ・芸術** 記録と風、風と音楽
- (24) **風と言語表現** 風にまつわる熟語と文化
- (25) **風とこれからの社会** 江戸風の見直し
- (26) **おわりに** 風の思い

(順番、内容が変わることもあります。)

続・工房見学記

大阪府大東市立諸福中学校
赤木俊雄

綿貫さん(編集部註：元公立中学校教員の綿貫元二氏)の工房について以前に紹介し



ました(編集部註：本通信第200号13ページ参照)が、前にも増して一段と充実しています。あらゆる分野の道具がすぐ取り出せるように配置されています。特に自転車整備関係の工具は自転車屋さんが開けるほどに充実しています。なおかつ技術力もプロ顔負けです。

「部品がないので、修理できない」と自転車屋に言われた私の自転車を見事に修理してくれました。クランク軸の回りのボールベアリングが割れて回転不能になった中から、手の感触で歪んだボールを選び出し、交換することができました。



今年の授業では、自転車のエネルギー変換と整備についても触れる予定です。

『ゼロからトースターを作ってみた結果』 トーマス・トウェイツ著 村井理子訳 (新潮文庫 810円 新潮社 2015年10月刊)



本書は、『ゼロからトースターを作ってみた』（飛鳥新社 2012年）の文庫改題版で、著者のトーマス・トウェイツはデザイナーである。2009年に英国ロイヤル・カレッジ・オブ・アートを卒業し、大学院の卒業制作として行ったトースター・プロジェクトを一般読者向けにまとめたものである。カバーの裏表紙には「トースターを全くのゼロから、つまり、原材料から作ることは可能なのか？ ふと思い立った著者が、鉱山で手に入れた鉄鉱石と銅から鉄と銅線を作り、じゃがいものデンプンからプラスチックを作るべく七転八倒。集めた部品を組み立ててみてはじめて実感できたことは、われわれを取り巻く消費社会をユルく考察した

抱腹絶倒のドキュメンタリー！」と紹介されている。新潮文庫最新刊の三行紹介には「結末はまじめな文明論です」と記されている。

「なぜトースターなのか」。私たち教員なら、トースターはここにこんな部品があって、それがこんな動作をしてというように、構成部品の性質や働き、電気機器のしくみや理論の学習（エネルギー変換の学習）に終始するのが一般的と思う。しかし、トーマス・トウェイツはとにかくすごい。よくもここまでと驚嘆する。プロジェクトに費やした期間はわずか9か月、移動距離と費用は3060km、約15万円と報告している。彼は本文の中で——ただのトースターに費やすには明らかに多すぎる出費だが、「いったい、どうやったら石ころがトースターになるんだ？」この根源的な疑問が無謀な冒険に僕を駆り立てた。「あると便利、なくても平気、それでも、やっぱり比較的安くて簡単に手に入って、とりあえず買っておくかって感じで、壊れたり汚くなったり古くなったら捨てちゃうもの」のシンボルが、トースターなんだ」「リバースエンジニアリングによってトースターの構成部品を調べ、世紀末にあっても入手可能であろう道具だけを使って、原材料からトースターを作り上げること。そして、その試みを記録すること」——と基本を述べ、実行している。実際、彼は、市販の一番安い（約500円）のポップアップ式のトースターを購入して解体し、部品を取り出す。さらに、部品の原材料まで遡る。そして、原材料となる鉄鉱石を入手して鉄を取り出したり、はたまた銅線を作ったり、一抱えもある丸太から木型をくり抜いてトースターの筐体を作ったりしている。産業革命以前の技術でどこまで可能か、今ある道具と技術の活用はどこまで許されるか悩みつつチャレンジしている。

内容構成は、プロローグから始まり、第1章 解体、第2章 鉄、第3章 マイカ、第4章 プラスチック、第5章 銅、第6章 ニッケル、第7章 組み立て、エピローグ「ハロージャパン」で構成されている。写真も豊富で、薦めたい一冊である。（藤木勝）

□ 会員からの便りを紹介します(1)—震災と学校

熊本の震災の状況は痛ましいばかりですが、それに関連した内容をサンネットから再録しました。

熊本の震災関連のニュースを見ていたところ、小学校の先生方が児童の状況把握を始めたという報道がされていました。家庭訪問も始め、本来の仕事に戻りつつあることが伝えられていました。先生方に笑顔が見られ、よかったと思います。

学校は公共施設ですが、そこで働く教員も「公共」なのかと考えてしまいます。救援物資や食事の配付などの仕事をしているのです。先生方にも家庭はあるし、被災もしている方もあるでしょう。それにもかかわらず、公共を優先するのです。避難してきている子どもたちの世話を優先しているわけではありません。民間企業の方は、自分の本来の仕事をしているのです。「教員は、なぜ、本来の仕事は後回しなのかなあ……」と、見てしまいました。

徐々に教員としての本来の仕事に戻りつつあることに「ほっと」しています。避難所でも補習などを徐々に始めるようです。
(東京・野本恵美子)

北海道でも、一昨年、大雨により、はじめて勤務先が避難場所として使用されました。3.11の東日本大震災以降、急に、空き教室に、それまでなかった毛布や非常食が備蓄されていましたが、本当に使われるとは想像していませんでした。

学校は休校となり、近所から避難されてきた方にマットや毛布、非常食を配付しました。はじめてのケースでしたので、私たちも派遣されてきた市の職員の方も不慣れで、手際が悪かったと思います。そのときは、一部の方しか避難して来なかったのも、さほど混乱もありませんでした。さぞかし、熊本は大変だろうと思います。

(北海道・三浦朋睦)

私の勤務する学校では、震災時に備えて、ディーゼル発電機とサーチライト、非常食のα米があります。このα米は3月のあるフェスティバルで提供されます。一度食べてみましたが、パサパサしています。横浜市から転任してきた先生の話では、震災時の訓練が学校であったそうですが、私の勤務校のある市にはそういうものはありません。

さて、震災と技術・家庭科の関係はどうかというと、エネルギー変換の学習でソーラー電池つき手回し発電機を製作しています(家でちゃんと保管しているか、聞いてみたい)。木材加工で使った杉の廃材もストックしています。これは焼き芋作りのときの燃料となります(3月に片付けのために半分を処分しました)。また、ロケットストーブ一台を製作中です。

日本の子どもには、震災に対する備えと震災を生き抜く教育が大切です。そのためにも、技術・家庭科の役割は大きい。
(大阪・赤木俊雄)

□ 会員からの便りを紹介します(2)—書籍紹介本の読後感

本号の図書紹介の書籍について、読後の感想がサンネットで紹介されましたので、再録しました。

藤木先生が紹介された『ゼロからトースターを作ってみた結果』（トーマス・トウエイツ著）（編集部註：本号9ページを参照）を読みました。

私は、中学2年生の電気学習の実習で、手回し発電機を作りました。この教材は、中国で作られた電子部品をハンダづけし、ネジ接合で組み立てれば、無事完成で、おめでとうということになります。

ところが、この本の著者は、身近な電気製品はどんな部品で作られているかということに興味を持ったのです。「今ある製品(服や木でできたテーブルでないもの)はもともと世界各地の地底に埋まっていた石ころや油だ。いったい、どうやったら、石ころがトースターになるんだ？」この根源的な疑問が、トースターを一から作るという無謀な冒険に駆り立てたわけです。それは青銅器時代から現代まで、文明の時空を巡る旅なのです。

彼の行動、つまり、まずやったことは、今あるトースターの解体でした。銅線・ビニルコード・鉄製の枠などの金属類、ニクロム線、抵抗などの電子部品、絶縁物、プラスチックのケースなど、部品総数404個です。そして、次にやったことは、作るルールを決めることです。一般的な道具は使用可、3D のデザインソフトやロボットは使用可としました。

鉱山に行き、鉄鉱石を掘り出して精錬します。プラスチックはジャガイモから作り始めますが、ひび割れができてしまい、失敗です。そこで、廃棄されたプラスチックで作ることになります。

いよいよ、観客の前で通電です。電気を供給するために製作した銅線には、基本的な安全装置が備わっていません。絶縁体もなく、人命を落とす可能性があります。そこで、王立植物園のゴムの樹液を利用する計画を立てましたが、断られます。やむを得ず、銅線はむき出しの状態で電源を入れました。発熱体の光は赤から白へ変わり、回路が壊れて煙が立ち上りました。

結局、パンは焼けませんでしたが、何でもやってみるところがおもしろいです。また、こんなことも書いてあります。

1882年、エジソン総合電気会社が契約者 800個の電球をつけるための発電所は日中の電気消費量がほとんどゼロなので、ピーク時間以外でも需要を増やす必要があった。それが家電製品の発明だ。

この本は岡山県立図書館で読みました。この図書館は来館者数も個人の貸し出し総数も日本一です。新刊本はほとんど揃っています。建物以上によかったのは、カウンターの案内の方の仕事ぶりでした。「困ったことがあれば、声をかけてください」という看板に誘われて、予約カードを作ってもらいました。私はパスワードを入れるの

が好きではないのですが、気持ちよくできました。

司書の方は、私の希望している本について、以前から知っているかのように、開架場所を教えてくださいました。司書の力はすごいです。司書の教えてくれた場所に行ってみると、多くの「ものづくり、技術論」に関する書籍があり、その中から探し出すことができました。

この文は机で本を読みながら書くことができました。気持ちのよい時間を過ごすことができました。図書館関係の予算がおそらく違うのでしょう。「戦争をする兵器を作るより文化予算を増やせ」と思った1日でした。
(大阪・赤木俊雄)

学習指導要領の改訂にかかわる中教審の審議状況について、技術教育・家庭科教育に関係のある部分を紹介します。

小学校部会

第1回審議:2016年1月20日	第2回審議:2016年2月4日	第3回審議:2016年2月22日
第4回審議:2016年3月14日	第5回審議:2016年4月25日	

中学校部会

第1回審議:2016年4月21日	第2回審議:2016年5月19日
------------------	------------------

高等学校部会

第1回審議:2016年4月13日	第2回審議:2016年5月9日
------------------	-----------------

産業教育ワーキンググループ

第1回審議:2015年12月7日	第2回審議:2015年12月16日	第3回審議:2016年1月8日
第4回審議:2016年1月8日	第5回審議:2016年2月1日	第6回審議:2016年3月28日
第7回審議:2016年4月27日	第8回審議:2016年5月18日	

情報ワーキンググループ

第1回審議:2015年10月22日	第2回審議:2015年11月24日	第3回審議:2015年12月22日
第4回審議:2016年1月20日	第5回審議:2016年2月23日	第6回審議:2016年3月15日
第7回審議:2016年4月20日	第8回審議:2016年5月18日	

家庭、技術・家庭ワーキンググループ

第1回審議:2015年11月30日	第2回審議:2015年12月15日	第3回審議:2015年12月15日
第4回審議:2016年2月16日	第5回審議:2016年2月16日	第6回審議:2016年3月11日
第7回審議:2016年4月13日	第8回審議:2016年5月11日	

(編集部)

□ 会員からの便りを紹介します(3)—新採用教員とともに歩む

今年も、全国各地の学校で多くの新採用教員が教壇に立っています。そのあたりのやりとりがサンネットに取り上げられましたので、再録しました。

私は、今年も非常勤講師として、昨年と同じ学校に勤務します。教えるのは週のうち木曜日と金曜日の2日で、1,2年生の技術科を担当します。職場では一番の年上です。

大阪では新規採用の若い先生方が大勢います。その中にはどのように教えるのか困っている方も多いと思います。このような方は、夏に行われる産教連主催の奈良大会(編集部註：第65次技術教育・家庭科教育全国研究大会)に参加して、勉強するのがいいちばんだと思います。(大阪・赤木俊雄)

新規採用の先生方がだんだん増えています。大学で勉強したことがすぐ授業に役立つわけではありませんから、実際の授業では何をどうすればよいかわからないのが現状です。

産教連のこうした活動に参加することは、大切な勉強の場になります。ぜひ、若い方を誘って来てください。(東京・野本恵美子)

滋賀県でも、今年は4名の新規採用の教員が入りました。先般紹介した「技術教育を語る会」(編集部註：産教連通信第206号19ページを参照)の活動は順調に進んでいます。4月24日には、新採用教員1名を交え、自主研修会を行いました。これは、前述の「語る会」のサブ研修会(?)で、若手教員を対象にして、初歩的なことや教材研究を行っています。この日は、ものづくりの基本として、千鳥格子パズルの製作およびメモホルダー作りを行いました。私にも教えられることが多いので、老体に鞭打って頑張っています。ちなみに、今年3月の「技術教育を語る会」の例会では、ガソリンの爆発実験教具“自称、バズーカ砲”の製作を行いました。

今年の奈良大会は、みんなに紹介して、一人でも多く参加していきたいと思います。(滋賀・居川幸三)

滋賀のサークル活動の進み具合が順調とのこと、嬉しく思います。今夏にはぜひ皆さんで参加してください。

新規採用の教員の中には、どこから手をつけたらいいのか、全く見当のつかない方もいます。先生の経験を活かし、技術教育のコツを若い方に伝授してください。

(東京・野本恵美子)

「技術教育を語る会」の活動については、教材業者にも協力してもらっています。その教材業者からいろいろな情報が伝わってくることもあります。教材業者と深く関わっていくと、癒着などの問題が指摘されそうですが、私たちとの関係においては、その心配はありません。教材業者も、「売らんかな」の姿勢ではなく、純粋に技術教

育のことを考え、ともに教材研究をしているので、一緒に運営しているわけです。

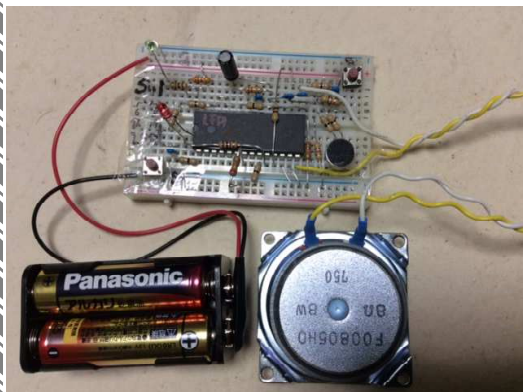
新規採用者や若手の教員にも教材を提供し、初歩的な技術から教えています。私も毎回参加し、一緒に教えています。また、この会の活動の中で、産教連で習得した技術やいろいろな教材を紹介し、その製作も行っています。教材業者は、その都度、材料を提供してくれます。といっても、新しいものではなく、いろいろな学校の準備室に眠っている「宝もの」を利用しています。

その“宝もの”は私も使っています。それは、技術科の専任教員がいなくなった学校の技術科準備室に眠っているものです。どれだけ忙しかったのかと思うくらい、準備室には教材の余りなどが整理されずに残っています。時には、ほとんど使わなかったのではないと思われる教材もどっさりあったりして、驚きです。教材の予備の部品や生徒のやり残した作品を集めて整理するだけで、電気学習の基礎実験教材などはすぐにできてしまいます。板材の切れ端なども、丸鋸盤で同じ大きさに切り揃えれば、入門教材くらいにはなるし、教具作りの素材にもなります。まさに、技術科準備室は宝の山なのです。教材業者も、技術科の専任教員がいなくなった技術科準備室の整理を頼まれることがあり、こうした「宝もの」を回収しているそうです。

夏の「匠塾」では、このような素材を使った小物作り(立体パズルや宝箱など)を紹介したいと思っています。
(滋賀・居川幸三)

私たちが技術・家庭科の研究会を開こうと思ったとき、新しい先生たちに声をかけるのは大変です。そのようなときには教材業者の助けを借りることです。私にも、三十数年お世話になっている教材業者がありますが、その担当者から他校の先生の様子もよく聞きます。今年は一歩進んで、教材業者と協力して、技術・家庭科を活発にする方法を研究したいと考えています。
(大阪・赤木俊雄)

先日紹介されたワンチップ IC 使用の録音再生キットを通信販売で購入しましたので、早速作ってみました。



製作の前に回路図を見ましたが、A4大の紙にうまくまとめてあります。久しぶりの電気工作でしたので、作業に2時間ほどかかりました。録音と再生の切り替えはジャンパー線の抜き差しによって行います。この原始的なスイッチのしくみは、生徒に教えるのにちょうどよいと思います。

さて、製作が終わり、点検をして電池をつなぎ、私の音声を入れてみると、無事再生できました。この瞬間は気持ちのよいものです。電気工作も時には頭の体操によいものです。
(大阪・赤木俊雄)
(編集部註：この教材については、本通信第207号24ページも参照ください)

第65次 技術教育・家庭科教育全国研究大会

主催：産業教育研究連盟 後援：奈良県教育委員会 奈良市教育委員会
(申請中) 奈良女子大学 奈良女子大学附属中等教育学校

大会テーマ 「巧みな手、科学する頭、くらしと社会を支える力を育む技術教育・家庭科教育」



会 場 **奈良女子大学**

〒630-8506 奈良市北魚屋東町(近鉄奈良駅下車徒歩5分)

日程・時程 **2016年8月5日(金)～8月7日(日)**

日 時	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18
8/5(金)	(受付)						実践講座 A ----- 実践講座 B		連盟 総会	
8/6(土)	受 付	はじめの 全体会	分科会 A ①電気・機械・情報 ②食と農	昼 食	分科会 A ③加工・もの作り	教材・教具 発表会	匠 塾(実技コーナー)	交 流 会		
8/7(日)		分科会 B (ラウンドテーブル方式)			昼 食	特 別 講 座	全 体 会			

* 準備の都合上、交流会は、大会参加申し込みの際に参加の有無の記入が必要となります。

参加費 全日程参加 4000円(会員 3000円, 学生 2000円)/一日のみ参加 2000円

産業教育研究連盟(略称 産教連) は技術教育・家庭科教育に関わりのある小・中・高・大学の教員や学生などで運営している民間教育研究団体です。

ホームページ(<http://www.sankyoren.com>) で日常の活動を公開しています。

□ 編集部ならびに事務局から

産教連通信の執筆要項を産教連のホームページ上で公開しています。この規定に沿って、原稿をどしどしお寄せください。原稿の送付先は編集部(下記参照)です。お待ちしております。

さて、今年度も残り少なくなりましたが、会費の納入はお済みですか。まだお済みでないようでしたら、**納入方よろしくお願いします(下記の財政部まで)**。

また、人事異動や転居などで住所・電話(FAX)番号・勤務先などに変更があった場合には、ご面倒でも、すみやかに事務局までご連絡ください。また、メールアドレスの変更についても、同様に連絡をお願いします。

編集後記

地震や豪雨のため、学校が地域住民の避難場所として使われる事例が、本号で紹介されていました。そして、避難場所となった学校に勤務する教職員が、救援物資の配付などに応援として駆り出されたとのことでした。

私事になりますが、2011年の東日本大震災のとき、教員をしている編集子の娘がこれと同じ体験をしたのです。以下は娘の話の概略です。

地震発生後しばらくして、避難場所となっている学校へ近隣住民が避難して来ました。在校中であった子どもたちの下校指導を済ませた後、手すきの教員が避難住民を体育館へ誘導し、長机やパイプ椅子を出して、避難場所として使えるように準備しました。その後も、食事・トイレ・寝具・懐中電灯の準備などの対応に教職員が駆り出されました。これらの仕事が一段落したのが午後10時過ぎで、それから遅い夕食を摂ったとのことでした。

非常災害で学校が避難場所となった場合、何がどこにあるのかなど、施設の状況をよく知っているのはそこで働いている教職員なので、どうしても手を貸さざるを得ないのでしょう。こうした場合の対応のしかたについて、事前に打ち合わせておく必要があると改めて認識した次第です。(金子政彦)

産教連通信 No. 27 (通巻 No. 208)

2016年5月20日発行

発行者 産業教育研究連盟

編集部 金子政彦 〒247-0008 神奈川県横浜市栄区本郷台5-19-13
☎045-895-0241 E-mail mmkaneko@yk.rim.or.jp

事務局 野本恵美子 〒224-0006 神奈川県横浜市都筑区荏田東4-37-21
☎045-942-0930

財政部 藤木 勝 郵便振替 00120-8-13680 産業教育研究連盟財政部